様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０２７４

研究課題名（和文）南北戦争文学におけるジェンダー規範の撹乱―ルイーザ・メイ・オルコットを中心に

研究課題名（英文）The Confusion of Gender Norms in the Civil War Literature: Louisa May Alcott and Other Writers

研究代表者
斎木　郁乃（Saiki, Ikuno）

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：９０２９４３５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、南北戦争中とその前後に書かれた小説、詩、書簡、素描、日記等に表れるジェンダーに関する言説を分析し、戦争という暴力による社会秩序の混乱がジェンダー規範に及ぼした影響を明らかにすることを目的とした。主にルイーザ・メイ・オルコットの作品に焦点を当て、メルヴィル、ホイットマンの作品と比較検討しながら、『病院のスケッチ』におけるジェンダー規範の逸脱と戦争を女性化する視線や、扇情小説『仮面の陰で』に見られる南北戦争ロマンスの要素について論じた。

研究成果の概要（英文）：My research project aimed at analyzing gender related discourses represented in novels, poems, letters, sketches, and journals written before, during, and after the civil war in America, and clarifying how the confusion of the public order caused by the war influences the gender norms. Focusing mainly on the works of Louisa May Alcott, sometimes comparing them with those of Herman Melville and Walt Whitman, I argued the diviation from female gender roles and feminization of the war in _Hospital Sketches_, and the elements of the civil war romance in her sensational novel, _Behind a Mask_.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：南北戦争　ジェンダー　オルコット　メルヴィル　ホイットマン

１．研究開始当初の背景

（１）南北戦争とジェンダーの関わりについての研究

①歴史学的・社会学的アプローチ

南北戦争とジェンダーの関わりについての研究は、まず 1990 年代に歴史学的・社会学的アプローチから始まった。奴隷制度廃止論とフェミニズムの密接な繋がりやジェンダーのレトリックと南北の政治的関係性について多角的に論じた Catherine Clinton, Nina Silber 編の *Divided Houses: Gender and the American Civil War* (1992)を皮切りに、戦時のジェンダーポリティクスを３人の女性の生き様を通して論じた Elizabeth D. Leonard の *Yankee Women: Gender Battles in the Civil War* (1994)、ジェンダーが南北戦争からリコンストラクションに渡る社会の変革に及ぼした影響を論じた Lee Ann Whites の *Gender Matters: Civil War, Reconstruction, and the Making of the New South* (2005)などが挙げられる。

②文学的アプローチ

歴史学的・社会学的アプローチに比べると、文学的視点を持つ研究は、*Civil War Women: The Civil War Seen through Women's Eyes in Stories by Louisa May Alcott, Kate Chopin, Eudora Welty, and Other Great Women Writers* (1990)のような南北戦争を描いた女性作家のアンソロジーや、Kathleen Diffley の“The Roots of Tara: Making of War Civil” (*American Quarterly*, 1984)のような女性作家による南北戦争文学を概観した論文は散見されるものの、Elizabeth Young の *Disarming the Nation: Women's Writing and the American Civil War* (1998)のような包括的な研究は数少ない。

（２）ルイーザ・メイ・オルコット研究

1943 年に Leona Rostenberg がオルコットが偽名で発表していた扇情的なスリラー物の作品群を発見して以来、地道な検証研究が続き、1975～83 年にかけて *Behind a Mask: The Unknown Thrillers of Louisa May Alcott* をはじめとする 5 冊のスリラー本が出版されるに至り、それまでのお行儀のよいキリスト教的教訓をふんだんに盛り込んだ児童文学作家としてのオルコット像を覆す、情熱的で無法者のフェミニストとしてのオルコット像が立ち現れ、現在に至るまでオルコット研究ブームと言ってもよい現象が米国内外の研究者の間で巻き起こっている。

（３）（１）及び（２）の研究史における問題点

①南北戦争とジェンダーの関わりについては、歴史学的又は社会学的なアプローチによる研究はかなり行われてきているが、文学解釈に基づく研究は未開拓の部分が多い。

②オルコットと南北戦争については、*Little Women* や *Hospital Sketches* のような南北戦争に直接言及したリアリズムの手法をとる作品に関しては研究が進んでいるが、オルコットが偽名で発表したスリラー物に残された南北戦争の痕跡については研究の余地が多く残されている。

③オルコットのような 19 世紀の女性作家は、研究対象として発掘された 1960～70 年代から、いわゆるキャノン作家と同列に置かれるようになった 80～90 年代を経て、同時代のキャノン作家の作品と対立ではなく対話させることにより、その時代をより正確に理解する時期に来ている。

２．研究の目的

本研究は、南北戦争中とその前後に書かれた小説、詩、書簡、素描、日記等に表れるジェンダーに関する言説を分析し、戦争という暴力による社会秩序の混乱がジェンダー規範に及ぼした影響を明らかにすることを目的とした。1860 年代に精力的な執筆活動をし、また自らも看護婦として「戦場の（妙齢の）独身女性」という性的マイノリティの立場で戦争を直接体験したルイーザ・メイ・オルコット（Louisa May Alcott）の作品に特に注目し、彼女の作品中に表れる公的空間と私的空間の交錯、母性や男装のレトリックにより隠蔽された性的欲望、「家庭の天使」「息子（夫）の戦死を悲しむ母（妻）」といった女性に期待される類型的な役割に対する反駁などを読み解きつつ、同時代の作家（ディキンスン、ジェイコブズ、ストウ、メルヴィル、ホイットマン、ローウェル、ホイッティアーなど）による南北戦争文学と比較検討した。

主な研究テーマは次の 4 点である。

（１）南北戦争が 19 世紀アメリカのジェンダー規範に及ぼした影響を、性的マイノリティに重点を置きつつ考察する。

（２）（１）の最も顕著な実例としてオルコットの南北戦争体験とジェンダー意識との関わりを *Hospital Sketches*(1863)を中心に読み解く。

（３）（１）、（２）の論証をもとに、オルコットのスリラー物に顕著なジェンダー規範からの逸脱を南北戦争との関わりで論じる。

（４）（１）～（３）の議論に基づいて、ディキンスンやジェイコブズらとオルコットを比較しながら「独身者(spinster)の南北戦争体験」を総括する。

３．研究の方法

（１）文献調査

南北戦争研究、ジェンダー研究、オルコット、メルヴィル、ホイットマン、池澤夏樹等個別の作家に関する一次・二次文献を収集し、精読し、情報を整理した。

19 世紀の新聞・雑誌記事や南北戦争に関する文書は、ニューヨーク公立図書館及びアメリカ議会図書館に滞在し、文献収集した。また、Making of America（コーネル大学)、

Project Gutenbergなどの19世紀の文書を集めたウェブサイトも活用した。

（２）テーマ（作品）研究

南北戦争を直接的にテーマとした作品、例えばメルヴィルの “Battle Pieces”、Whitman の “Drum-Taps”、オルコットの *Hospital Sketches*, *Little Women*, *Work*, “My Contraband”などの作品を精読し、戦争とジェンダーの関わりの描写方法を比較検討した。

V.V.; or, Plots and Counterplots、*Behind a Mask; or , A Woman's Power*、*The Abbot's Ghost; or, Maurice Treherne's Temptation* などのオルコットのスリラー作品におけるジェンダー規範の攪乱を読み解き、その表象が南北戦争と関連付けて論じられる可能性について検証した。

（３）コンテクスト研究

匿名の詩や日記等も含め、南北戦争について書かれた言説を、Library of America の Civil War シリーズなどを中心に広く概観した。また、Elizabeth D. Leonard、Leeann Whites、George C. Rable らによる南北戦争とジェンダーについての議論を通読した。

（４）成果発表

（１）～（３）の過程で得た考察を言語化し、国内外の学会で口頭発表するとともに、その場で様々な分野の研究者たちと意見交換することにより議論を洗練させたのち、発展させた形で論文として投稿した。

４．研究成果

⑴南北戦争が 19 世紀アメリカのジェンダー規範に及ぼした影響を、性的マイノリティに重点を置きつつ考察した。

南北戦争とジェンダーに関する先行研究が共有している結論として最も重要なのは、南北戦争のもたらした社会的混乱が一時的にヴィクトリア朝的なジェンダーロールの基準を無力化したということである。戦場に去った男性に代わって残された女性たちが家庭のみならず公的空間での主導権を握ったり、傷病兵の男性性が弱められる一方で看護する女性が男性化したり、戦場の混乱に紛れて同性愛的欲望が顕在化したり、様々な状況下でジェンダー規範からの逸脱が許されたと考えられる。このような戦場におけるジェンダー規範の揺れを、ディキンスン、ジェイコブズ、ストウ、メルヴィル、ホイットマン、ローウェル、ホイッティアーなどの広範囲な南北戦争文学から読み取った。

この研究成果を、International Conference of Melville and Whitman(2013 年 6 月）にて、“The Rhetoric of Maternity in the Civil War: Melville, Whitman, and Alcott”と題して口頭発表した。この発表は、戦争のカオス的状況がジェンダー規範に与えた影響を、メルヴィル、ホイットマン、オルコットの作品における母性のレトリックに焦点を当てながら、そのレトリックが最終的には戦争や国家そのものへの批判ともなる可能性を論じた。

⑵⑴の最も顕著な実例としてオルコットの南北戦争体験とジェンダー意識との関わりを *Hospital Sketches*(1863)を中心に読み解いた。

南北戦争がオルコットにプロの作家としての意識を植え付ける上で重要な役割を果たしたことは、南北戦争前後の 1860 年代がオルコットが最も精力的に執筆活動を行った時期と重なっていることや、彼女が最初に文学的･商業的評価を得た *Hospital Sketches* が従軍看護婦体験を記した作品であったことからも明らかである。30 歳の独身女性として戦地の病院に出向いたオルコットによる妻でも母でもない成熟した大人としての社会における役割の模索や、傷ついた男性の体を間近で見ることの衝撃と秘められた欲望を、*Hospital Sketches* 及び書簡や日記から分析した。

この研究成果を、「『病院のスケッチ』におけるオルコットのジャーナリズム」（『英學論考』44 号）にまとめた。これまでは、本作品の第 4 章、すなわちヴァージニアの鍛冶屋ジョンがオルコットのペルソナであるペリウィンクルの懸命な看護のもとに英雄的な死を遂げるエピソードに焦点が当てられがちであったが、本論文では、あまり論じらることのなかった 1，2 章が女性の従軍の難しさを告発していることや、手紙の代筆や看護を通して兵士の内面に迫る戦争を女性化する視点を分析し、オルコットのジャーナリズムについて一考察を加えた。

⑶⑴、⑵の論証をもとに、オルコットのスリラー物に顕著なジェンダー規範からの逸脱を南北戦争との関わりで論じた。

南北戦争が、オルコットの内面に抑圧されていた、男性的な行動や冒険への憧れや、社会が女性に期待する「家庭の天使」的な役割への不満を解き放ったとすれば、その結果が A. M. Barnard という性別不明の偽名を用いて発表したスリラー物の作品群であるといえないだろうか。“My Contraband”(1863), “Behind a Mask: or, A Woman's Power”(1866),“A Modern Mephistopheles, or The Fatal Love Chase”(1867)ほか多数のスリラーを分析し、男女間の権力闘争、異人種間の情愛、同性愛的欲望、詐欺、ドラッグ、殺人、催眠といったあらゆるセンセーショナルな小道具を用いて、オルコットがいかに女性の自立のための葛藤と父権主義的文化への反逆を表現したかを論じた。

この研究成果を、『オルコットのスリラーと南北戦争』（2015 年 4 月）と題した講演にまとめた。オルコットの A. M. Barnard 名義の扇情小説のうち、特に文学作品としての完成度が高く最もフェミニスト的な内容を持つ *Behind a Mask; or, a Woman's Power* に焦点をあて、これまでの批評ではほとんど論じられてこなかった、南北戦争

との関わりについて考察を加えた。オルコットと南北戦争と言えば、*Little Women* ではその物語の背景となっていて、マーチ家の父親は北軍の牧師として不在ながらも 4 人の娘たちが little women (淑女)に成長するのを見守る、家父長制度的な枠組みを担っている。また、*Hospital Sketches* は、オルコット自身の従軍看護士体験に基づくフィクションであり、*Work* においては、主人公のクリスティーは、夫のデイヴィッドが南北戦争で戦死したのを機に女性として真の自立を遂げる。こうしたまじめな作品群だけでなく、オルコットの扇情小説にも、何らかの形で、南北戦争がジェンダー規範にもたらした揺れや変化が反映されているのではないか、という仮説に立ち、*Behind a Mask* における南北戦争の影響を、1. 南北戦争中にさかんに出版された戦争ロマンスと *Behind a Mask* のプロットの類似の観点から、2. *Behind a Mask* で描かれるジーンの看護の技術に暗示されるエロティックなニュアンスと、戦場病院におけるエロティシズムの抑圧の観点から、の 2 点から考察した。
(4)(1)～(3)の議論に基づいて、ディキンスンやジェイコブズらとオルコットを比較しながら「独身者(spinster)の南北戦争体験」を総括した。

南北戦争はハリエット・ジェイコブズのような逃亡奴隷に執筆の機会を与え、世情を顧みることの少なかったエミリー・ディキンスンに戦争詩を書かせ出版への意欲を持たせた。人種や階級の異なる未婚女性の南北戦争体験を比較検討し、性的マイノリティの視線から南北戦争をとらえ直した。

また、2011 年の東日本大震災をきっかけとして、戦争、核エネルギー、災害と自然、ジェンダーという新たな発展的なテーマにも取り組んだ。その研究成果を、 “Melville, Ikezawa, and the World after 3.11”と題し、戦争と環境とジェンダーについてメルヴィルと池澤夏樹の作品を比較分析し、第 10 回国際メルヴィル学会にて口頭発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 斎木郁乃、『病院のスケッチ』におけるオルコットのジャーナリズム、英學論考、査読無、 44 号、2015 、43－54

〔学会発表〕（計３件）

① Ikuno Saiki, Melville, Ikezawa, and the World after 3.11, International Melville Conference: Melville in a Global Context, June 2015, Keio University (Tokyo)
② 斎木郁乃、オルコットのスリラーと南北戦争、名古屋大学英文学会、2015 年 4 月、名古屋大学（名古屋）
③ Ikuno Saiki, “The Rhetoric of Maternity in the Civil War: Melville, Whitman, and Alcott,” International Melville Conference: Melville and Whitman in Washington, June, 2013, Washington DC (USA)

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
斎木　郁乃（SAIKI, Ikuno）
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：90294355